（第７号様式）

学位論文審査結果の要旨

氏　　　　名	堀内　史枝
審　査　委　員	主査　石井 栄一 副査　野元 正弘 副査　熊木 天児 副査　古川 慎哉 副査　永井 勅久

論　　文　　名　　自閉症スペクトラム障害における感情および行動上の問題：学齢・性別毎の定型発達児との比較

審査結果の要旨（2,000 字以内）

　発達障害の１つである自閉症スペクトラム（ASD）はその発達障害に併存する二次性障害を早期に捉えて介入することが重要である。本論文は ASD 症例について自己記入式質問票 SDQ を評価、解析し、二次障害の予防および治療について考察した研究である。

　解析は ASD およびコントロール群を年齢および性別で分類し、情緒、行為、多動・注意、仲間関係、社会性の５つの項目について比較検討を行った。その結果、情緒については ASD 群で小学校高学年にピークとなり、行為については女性で小学校高学年顕著となった。多動・注意では中学生で顕在化し、仲間関係は ASD 群では年齢に関わらず高値となり、社会性は男性で小学校高学年、女性で低学年より獲得できることが分かった。以上より、SDQ を用いて年齢・性別の ASD の問題点を評価するは二次障害の予防および治療に有用である、と結論している。

本研究に関して各審査委員より、いくつかの質問が行われた。その質疑の内容について以下に簡単に記載する。

１．ASD 症例が増えている要因はなにか。→診断の問題や社会的背景の変化が考えられる。

２．治療や薬物の効果はどうか。→20％の症例が薬剤を使用しており、80％は親の希望などにより介入している。

３．コントロール群の男性で臨床群が多いのはなぜか。→本来 10％程度は正常でも存在しており、普通の結果と考えられる。

４．ASD の病態で分かっていることはあるか。→いくつかの遺伝子異常も同定されているが、確定したものはない。

５．疾患概念について。→今回 DSM-IV を使用したが、DSM-V で概念の変更が行われている。

６．早期介入は有効か。→行動パターンを同定して介入すれば、有効と考えられる。
７．ASD 群とコントロール群では地域性に差はないか。→差はほとんどない。
８．SDQ を両親ではなく本人に評価させると違った結果が出るのではないか。→現在それは検討中である。
９．早期介入の適正な時期はどうか。→時期や介入内容は不明な点があるので、今後検討していきたい。
１０．ASD 群における SDQ で支援不要となる理由はどうしてか。→SDQ 回答者が母親であり、親から見ると正常と判断されてしまうため。
１１．調査票一部未記入者を調査対象から除外している点について今後どう扱うか。→今回の解析結果と齟齬がないかどうか検討したい。

以上申請者は各質問に対して明確に応答し、学位授与に値する充分な見識と能力を有することが認められた。